奈良女周辺の地図

中沢　隆
理学部　化学生物環境学科化学コース　教授

1. 平城宮跡

西暦 710 年から 784 年まで、平城京は日本の首都であった。平城宮には首都の機能が集中しており、ここで作成される文書はすべて、遷都のちょうど 100 年前の 610 年に高麗の僧によって製法がもたらされた[日本書紀・推古 18 年の条]墨で書かれていたはずである。その墨は国営の工房（中務省・図書寮）で「造墨手」と呼ばれる公務員（定員 4 名）が製造していた。2014 年に本学と奈良文化財研究所の共同研究で、この平城京跡に 1200 年以上埋もれていた墨からウシのコラーゲンを検出し、当時の墨の材料である膠が牛皮を原料としていることを明らかにした（http://hdl.handle.net/10935/3614）。分析した墨の一つは長屋王邸と藤原麻呂邸の間の側溝から大量の木簡（二条大路木簡という）とともに出土した。長屋王と吉備内親王夫妻の悲劇は有名であるが、その邸宅跡が光明子の皇后宮となったことは意外に知られていない。藤原不比等の娘の宮子（2. 「黒髪山稲荷神社」参照）を母とする首皇子を聖武天皇にし、これまた不比等の娘の光明子をその皇后にしたい藤原氏に対し、長屋王は天武天皇直系の孫として聖武天皇の最大の政治的ライバルと目されていたことがこの事件の背景とされている。こうした歴史的背景をもとに、長屋王邸跡地を大規模な史跡公園・博物館付き観光施設にでもしていたら、跡地にできた商業施設が「長屋王の呪い」に悩まされることがなかったのではないだろうか。

2. 狭岡神社・常陸神社・黒髪山稲荷神社

いずれも佐保川、佐保山をはじめ、本学同窓会の「佐保会」などに名を残す佐保姫と何らかのつながりがあるらしい。狭岡神社は藤原氏が氏神として春日大社を創建した 768 年より半世紀も早く、藤原不比等が 716 年に創祀したと伝えられている。境内には佐保姫ゆかりの池（鏡池）や伝承地であることを示す石碑がある。ところが不思議なことに狭岡神社の 7 柱の祭神に佐保姫は含まれていない。その佐保姫は狭岡神社から奈良高校を挟んで東側にある常陸（「ひだち」と読む）神社の祠の一つで、「佐保姫大神」として祀られている。さらにその常陸神社の中には明治時代に法蓮字大黒が芝（旧ドリームランド北東側の丘の上）から移設されたという法蓮稲荷神社がある。元々この稲荷神社があった大黒芝の丘には 1 歳

足らずで亡くなった聖武天皇の基（もとい）皇子の那富（ナホ＝奈保？）山御陵があったため、移転はこれを憚る宮内庁の要請によるらしい。現在、この丘陵地は黒髪山と呼ばれ、その名の由来の一つに佐保姫が切った黒髪を埋めたという伝説がある。古事記の垂仁天皇の条は佐保姫が髪の毛を切った経緯を次のように伝える。皇后である佐保（沙本）姫の兄（沙本毘古王）が義兄の垂仁天皇を殺そうとしたところ、事が露見して戦になり、佐保姫は兄に付いたが生まれた皇子は天皇に渡そうとした。天皇は皇子とともに佐保姫も連れ戻そうとするがそれを察知した姫は、髪を掴まれて捕まらないように黒髪を切り、服は引っ張られたら破れるように「酒で腐らせる」といった工夫で逃れ、最後は兄に殉じて亡くなるという悲劇である。筆者が絹のタンパク質の研究で古代の絹と養蚕について調べていた際に、本当に酒で絹が腐るのか疑問に思い、この問題に奈良市立一条高校の「課題研究」で生徒数人と取り組んだ。その結果、発酵している酒の中で絹糸がまず伸びて、次いで切れやすくなるという予想外ではあるが、麹菌のタンパク質分解酵素が佐保姫の衣服の絹を傷めたと解釈できる現象を見出した。つまり、古事記の記事が現実味を帯び、佐保姫も伝説上の神様（常陸神社）というよりこの地区に実在した高貴な女性と考えてもおかしくなくなった。現在の奈良市の佐保地区は垂仁天皇の時代から既に「沙本」と呼ばれ、沙本一族の佐保姫は開化天皇の孫にあたる。それにも関わらず佐保姫が表立って祀られていないのは兄が叛逆を企てたためであろう。ところで黒髪山の「黒髪」は、文武天皇の夫人（皇后ではないことに注意！）として聖武天皇を産み、近くの那富山御陵に葬られた基皇子の祖母となる藤原宮子が髪長姫とよばれていたことに由来するという説もある。実際、この黒髪山稲荷神社の隣には「佐保山西陵七ツ石　聖武天皇生母藤原宮子后宮墓陵石」と錆びかけた鉄板にペンキ書きの、天皇の生母にして藤原不比等の娘で、かつ光明皇后の姉という貴人にはおよそふさわしくない看板が、あたかも人目を憚るようにして立っている（写真１）。和歌山県の道成寺に伝わる伝説によると宮子姫は御坊の海人（漁師）の娘でその美貌と長い黒髪で不比等の目にとまって宮中に入り、ついに文武天皇の夫人となったという。しかし皇子の生母が庶民の娘では具合が悪いので不比等が自分の養女にした（梅原 猛「海人と天皇」）。宮子が後に聖武天皇となる首皇子を産んだのが 701 年で、ちょうど同じ年に文武天皇が宮子の故郷（伝説によれば）に道成寺の創建を勅願したのは、いかに天皇家が世継ぎの皇子の誕生を喜んだかがよくわかる。それと同時に、このあまりに粗末な看板を見れば、藤原氏がなぜ宮子姫を歴史の表舞台に出したがらなかったかが実感できるであろう。なお、御坊市では毎年 10 月に藤原不比等役も加わる「宮子姫行列」が行われていると、和歌山高専の土井正光教授から伺った。写真の看板を御坊の人が見たらどう思うだろうか。

東大寺から平城宮跡にかけての佐保路には、佐保姫や藤原宮子、そして藤原不比等の足跡

がどこかにまだ隠れているかもしれない。

写真　史跡・大黒芝の案内板